

令和5年度

全国中学生人権作文コンテスト

# 新潟県大会作文集



新潟地方法務局  
新潟県人権擁護委員連合会

～ 人権啓発キャッチコピー～  
「誰か」のこと じゃない。



令和5年度 全国中学生人権作文コンテスト 新潟県大会表彰式

（ 令和5年12月9日 ）  
於 新潟市民プラザ

## は し が き

新潟地方事務局と新潟県人権擁護委員連合会は、全ての人がお互いの人権を尊重し合うことの大切さを伝えるための人権啓発活動の一環として、昭和四十七年度から、中学生人権作文コンテストを実施しています。

このコンテストは、次代を担う中学生の皆さんに、人権問題についての作文を書くことを通じて、人権尊重の大切さについての理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けてもらうことを目的として実施しているものです。

五十回目の節目を迎えた本年度の新潟県大会には、県内百八十四の中学校から、九千百五十五編に及ぶ多くの作品が寄せられました。

いずれの作品からも、次代を担う中学生の皆さんが、現代社会の人権課題を自分の問題としてしっかり認識した上で、前向きに考えていることが分かりました。また、感受性豊かな視点は、互いの人権を尊重し合うことの重要性を改めて訴えかけるものばかりでした。

この作文集には、数次にわたる審査を経た優秀作品十二編を収録しました。より多くの方々にお読みいただいて、地域社会に人権尊重の輪が一層広まり、人権問題を「誰か」のことではなく、自分のこととして捉え、配慮し合うことのできる、やさしく思いやりのある社

会が築かれるための一助となることを願ってやみません。

終わりに、本コンテストの実施に当たり、熱意を持って応募された中学生の皆さんを始め、多大な御尽力・御支援をいただきました新潟県教育委員会、中学校、御後援各社等関係各位の御理解と御協力に対しまして、深く感謝申し上げます。

令和六年二月

新潟県地方務局長 相原茂

新潟県人権擁護委員連合会会長 山崎光子

令和五年度

全国中学生人権作文コンテスト

新潟県大会作文集

# 目次

## 審査講評

自分事として考える …………… 審査員代表 塚田朋弘 …… 1

## 新潟地方法務局長賞

「それだけで」 …………… 柏崎市立第三中学校 三年品田玲菜 …… 3

## 新潟県人権擁護委員連合会会長賞

受け入れる …………… 新潟県立津南中等教育学校 二年鈴木雫月 …… 6

新潟県教育委員会教育長賞

僕の母親 ……………

新潟市立東新潟中学校 三年 山口 光 …… 9

新潟日報社賞

全身で自分を表現できる社会 ……

新潟市立内野中学校 三年 立石 灯 …… 12

NHK新潟放送局長賞

あなたの道 ……………

粟島浦村立粟島浦中学校 二年 氏名非公表 …… 15

アルビレックス新潟賞

誰もが輝ける社会に ……………

長岡市立青葉台中学校 三年 榎田 晴 …… 18

審査員特別賞

「知る者が守る」……………

魚沼市立湯之谷中学校 三年 氏名非公表 …… 21

優秀賞

未来のために……………

新潟市立下山中学校 三年 矢野 希 …… 24

ありのままの自分へ……………

新潟市立白根第一中学校 一年 田中 優里 …… 27

誰もが話しやすい環境を……………

新潟県立佐渡中等教育学校 二年 中村 虹湖 …… 30

見たく目で決めるな……………

佐渡市立松ヶ崎中学校 一年 中村 太一 …… 33

心の中の「部屋」……………

魚沼市立広神中学校 三年 佐野 心 …… 36

令和五年度全国中学生人権作文コンテスト新潟県大会入賞作品 …………… 39

令和五年度全国中学生人権作文コンテスト新潟県大会応募作品内容別内訳調べ …………… 41

「いじめ問題に関する再度の緊急メッセージ」 …………… 42

## 自分身として考える

審査員代表 新潟日報社編集局報道部第二部長 塚田朋弘

いまの若い人たちにとって、情報はネットで取得するのが当たり前になっているでしょう。そう思い、人工知能(AI)が文章をつくる生成AIに「人権を説明して」とお願いしてみました。次がその答えです。「人権は、全ての人が生まれながらにして持つ基本的な権利であり、それによって個々の尊厳と自由が保護されるべきものです。これには生命、自由、安全、表現の自由、平等などが含まれます。人権は法的に保護され、尊重されるべき普遍的な価値観と考えます」

とても簡潔な答えが返ってきました。そして、「普遍的な価値観」と強調してくれていたことに、少しほっとしました。というのも、本年度の応募作品を読むにつれ、今の社会の中で、人権が「普遍的な価値観」として浸透しているわけではないことを、突き付けられたように感じていたからです。

なぜ、学校でのいじめはやまないのでしょうか。なぜ、容姿や話し方がちょっと人と違ったり、性別や性自認が異なったりするだけで差別されなければいけないのでしょうか。

応募作品からは、今を生きる中学生一人一人が、そういった問題に対する率直な疑問だけでなく、どう乗り越えていくかについて自分身として考え、真剣に向き合っている姿が伝わってきました。

新潟地方務局長賞に選ばれた柏崎市立第三中学校3年の品田玲菜さんの作文「それだけで」は、「な

んかむかついたから」というほんの些細な理由でいじめが始まること、そして勇気を出して行動することで状況が大きく変わることを、個人的な体験から普遍的な問題として訴えていて、非常に説得力がありました。

新潟県人権擁護委員連合会会長賞の新潟県立津南中等教育学校2年の鈴木雫月さんの作文「受け入れる」は、自らの上肢不自由という障害を通して、人と違うことに疎外感を感じながらも、自分が「違い」を受け入れることで、社会の偏見をなくしていきたいという、強い決意を感じました。

人は一人では生きていくことができません。そして二人以上になれば、その間には必ず「違い」が存在します。どんなに仲のいい家族、友人とでもそうです。違いを理解し合うことができれば、その関係の中でルールを作り、お互いを尊重することができます。そこには一つの「社会」が生まれているのです。

ただ実際の社会はそれほど単純ではありません。違いを認め合うには、社会は大きく、複雑すぎるのです。だからこそ、人権は誰もが共有できる「普遍的な価値観」でなければなりません。そしてそれは、誰かから与えられたり、押し付けられたりするものではなく、一人一人が自らの経験を通して、自らの心の中に培っていくものなのです。新潟県の代表となった二つの作文をはじめ、今回の応募作品の多くは、そのことを具体的な事例をあげて、分かりやすい言葉で、教えてくれています。

残念ながら、この世界には戦争をはじめ、人種差別やパワハラ・セクハラ、そしていじめなど、人権が脅かされる事例が後を絶ちません。私たち大人が「仕方ない」「よくあること」などと、目をつむって見過ごしてしまっているからにはかなりません。

一人でも多くの人がこの冊子を手に取り、さまざまな人権問題について自分事として考えることで、人権がより普遍的な価値観として根付いていくことを願ってやみません。

「それだけで」

柏崎市立第三中学校

三年 品しな田だ玲れ菜な

「あの子見ると、ムカつかない？」

それが始まりでした。続いて、分かる、だよねえ、という共感の声。そして、私の名前と、私への悪口が、教室からはっきりと聞こえてきました。私は黙って、廊下を立ち去りました。

小学校に通っていた頃、いじめが起きました。その標的は私。ある日から急に、周りの態度が変わりました。私が話しかけても、誰も口を利いてくれなくなりました。無視

をされるようになったのです。なぜ悪口を言われていたのか？なぜいじめられるようになったのか？なぜこんな目に…？もやもやしながら毎日を過ごしていました。

そんな私に、手を差し伸べてくれたのは、親友でした。彼女は私と話してくれたし、優しく接してくれました。

「周りなんて気にしないで。大丈夫。そのままでもいいんだよ。」

いつでも明るい彼女らしからぬ、真剣な声で、そう言われました。親友の言葉で、私はとても救われました。

またある日から急に、私は、周りから無視をされなくなりました。前までの無表情は嘘だったかのように、みんな笑顔で話しかけてくるので、かなり奇妙でした。しかし、私の親友が教室に入ってきた途端、みんなの笑顔が消えました。おはようと彼女が言っても、

誰もそれに応えない。その瞬間の教室が静かすぎて、私も挨拶を返せませんでした。

そう、今度は、私の親友がはじめの標的となったのです。しかも、私がされた事より、ひどい事をされていました。無視や、悪口に加えて、画鋲を靴に入れられたり、蹴られたり…。私は、先生に相談することを、迷ってしまいました。はじめのことを言ったら、また私が標的になるのではないか、今度はもっとひどいことをされるのではないかと、不安で頭がいっぱいになりました。だけど、「彼女が私を助けてくれたように、今度は私が彼女を助けたい。」という思いも、とても強くありました。その思いを胸に勇気を出して、私は先生に相談しました。

先生に相談したら、はじめはすんなり収まり、いじめの中心にいた人からも、謝ってもらえました。その時に、私がずっと疑問だっ

た、「なぜいじめを始めたのか」という事、その理由を聞きました。すると、

「気が合わなくて、なんかムカついたから。軽い気持ちでやろうと思った。」

という答えが返ってきました。

それだけで？と私は思いました。それだけで、私たちは傷つけられたのか…。

この経験から私が学んだことがあります。それは、いじめをなくすことは難しい、ということ。世界には、色々な人がいます。その中には、自分と気が合わない人や、腹が立つ人などもいるでしょう。そんな人へ、自分の思いを伝える悪い方法の一つが、いじめです。世界の人々が、全員同じ見た目や、同じ考えにならない限り、いじめは起きてしまうでしょう。

今や、いじめてきた人たちは、楽しそうに毎日を送っています。その人たちを、もう私

は恨むつもりはありません。だけど、これだけは伝えたいです。

いじめにあった人には、あなたたちが持っていた軽い気持ちよりも、大きな勇気が必要だったこと。あなたたちがやったことを忘れられても、私たちはやられたことを忘れられないこと。そして、いじめをする前に、他に思いを伝える方法はなかったのか、一度考え直して欲しかったこと。

思いを伝えたいなら、直接言ってくれればよかったのです。私と気が合わないなら、干渉せず、関わらなければ良かったのです。相手を傷つけない、色々な方法があったはずで。態度で示してくれば、あなたたちの思いも、多かれ少なかれ気づけたのです。

だけど、体験したことから、悪いことだけではなく、良いことも学べました。いじめが起きたら、何か行動することが大切だという

ことです。友達に寄り添ってもらえて、私の心は救われましたし、勇気を出して相談したこと、いじめは収まりました。少しの行動で、状況が大きく変わることがあるのです。何かが変わる可能性を生み出せるのです。

これからも私は、色々な人に出会い、色々な思いを抱くでしょう。そして、いじめに関わる時が、またくるのかもしれない。その時は、この言葉を思い出したいです。

「いじめをやってしまう前に考え直す。いじめを見つけたら、何か行動する。」

それだけで、きっと、傷つく人を減らすことができるでしょう。

きっかけは、単純なのです。



## 受け入れる

新潟県立津南中等教育学校

二年 鈴<sup>すず</sup>木<sup>き</sup>零<sup>しずく</sup>月<sup>く</sup>

私は「上肢不自由」という軽度の障がいを持つている。人差し指を含めた左上肢の三指の機能の著しい障がいである。指の上の方がなかったり、一部が太かったり、短かったり。他にも足の指先がなかったり、足首が麻痺して思うように動かなかったりする。

小学五年生の頃、私は自分の障がいを意識し始め、とても嫌になった。当時の自分にとって他の人と体が違うということはとても辛いものだった。例えば外食する時。足は服

や靴で隠すことができるが、手はご飯を食べる際などの細かい作業に使う。だから手を隠しながらご飯を食べることは難しい。でも私は周りの人にどのような目で見られているのか、どう思われているのか想像したらとても怖くて、手を見せることができなかった。だからなるべく服の袖で隠しながらご飯を食べていた。親に「何でそんなに手を隠しているの」と聞かれたこともある。私は自分が思っていることをお母さんに伝えた。話し終えるとお母さんは私の目を見ながら「普通の体に産んであげられなくてごめんね。」と言った。

小学六年生。今度は写真に映る自分の姿を気にするようになった。周りの人たちはあるのに自分には「指」がない。両手でピースができない。思ったようにポーズをできないし、形も変。写真を撮られたときに映る自分の障がい、鏡に映る自分の障がいをとても気

持ち悪いと感じてしまった。そして心の底からみんなと同じ体で生まれてきたかかったと思っただ。

そして中学一年生前半。私は地元にある学校ではなく、家から少し離れた学校に通うことを決めた。もちろん周りは知らない人ばかりだ。そこでは入学式の次の日にオリエンテーション合宿というものがある。合宿中には手を深めるための遊びもある。その遊びの中で手を使うものがいくつあった。私はこれから仲良くなるとわかっていても、まだ顔と名前も一致しないような人たちに自分のコンプレックスを見せることが本当に嫌で、楽しい時間なのに気分は上がらなかった。中には障がいについて聞いてくる人もいた。普通を装って答えるけど、自分の障がいについて誰かに話すたびに他の人とは違うことを実感し、辛くなった。家に帰ってからそのことを

伝えたら、「普通の体に産んであげられなくてごめんね。」と言った。この時やっと気づいた。今まで何回も言われてきたこの言葉。お母さんにこんな言葉を言わせていいのだろうか。誰だって周りと比べたら少し劣っていることや苦手なことはあるはず。障がいだってそれと同じだ。障がいを持っていただけでなんでこんなに周りのことを気にしなきゃいけないのか。そう思うととても悲しくなった。親に私が赤ちゃんだった頃の話を知ると、相当大変だったという。帝王切開で生まれ、一歳にならないうちに手や足の手術。この先歩けるようになるためには数ヶ月、足にサポーターのような器具をつけなければならなかった。障がいのある子が生まれると知ったとき、生まれてきたとき、両親はどう思っただろう。きつと想像できないほど辛かったと思う。でも障がいがあるのが一人の間だ。

今は昔に比べたら障がい者に対する偏見や差別もなくなった。だが、全てなくなったのかと言われればそうじゃないし、完全に受け入れてもらえてるわけじゃない。例えば命に関わる仕事を障がい者がやっていたらどう思うか。私は一瞬でも驚いたり、心配したりする人がいると思う。でも障がいを持っていない人だったら何も驚かない。これは平等に接してもらえていない。障がいを持っているだけに周りは不思議な目で見られる。みんなと同じように見てもらえない。受け入れてもらえない。

確かに障がいをもって人はもっていない人に比べて少し劣っているところやできないことがあるかもしれない。だからってその人の本当にやりたいことへの道を塞いでしまっ  
てはいいのだろうか。それはその人を否定していることになる。障がいを持っていても好

きなことをしたい。何をやってもいいに決まっている。このことは障がいを持ってない人たちにも言える。だれがどこに行こうが、好きなことをしようが、何の疑問もなくみんな平等に接してもらえる世界になってほしいと思う。「受け入れる」っていうのはこういうことだ。そんな世界の実現を目指すために、まずは自分自身が障がいに対する、人に対する偏見をなくし、障がいを理由に言い訳したりするのではなく、一つの個性として向き合い、受け入れ、自分を好きになって堂々と強く生きていけるようにしたい。私は私に生まれてきたこと後悔していない。もう二度とお母さんに「普通の体に生んであげられなくてごめんね。」なんて言わせない。



## 僕の母親

新潟市立東新潟中学校

三年 山やま口ぐち 光ひかる

記憶の中にいる母は、いつも病気と闘っていた。僕には障害を持つ母がいる。

僕の母は、先天性の脊髄小脳変性症を患っている。脊髄小脳変性症とは、主に小脳の神経細胞の変性により、歩行時のふらつき、手の震え、呂律が回らないなどの症状が伴う国の指定難病にも該当される病気だ。そして発症後は、ゆっくりと症状が進行し、治療法も見つかっていないため、生涯にわたり病気と向き合わなければならぬ。現在の母は、病気

が進行しているため車いすで生活している。食事、入浴、トイレなど生活行動のほとんどを家族の助けを借りなければならない。

ある時、買い物の帰りに母と二人で迎えの車が来るまで周辺を散歩していた。その日はよく晴れていて、気分も浮かれていたせいか、母との会話に夢中になって、アスファルトのひび割れた部分に気づかず、車いすに乗っている母を横転してしまったのだ。お互い楽しく会話をしている中での、「ガタン」という大きな音で目の前から母が消えるまで、頭が真っ白になり何が起こったかわからなかった。母は転んだことにより膝から血を流していた。幸い周りにいた大人が助けてくれたおかげで無事に帰れたものの、それ以来母の車いすを押し外を出歩くことが怖くなった。母も怖い思いをしただろう。車いすに乗る人は、車いすを押す人を信頼して車いすに座っている。

母を横転させ、怪我をさせ泣かせてしまったことから、当時の僕は車いすを押す権利をなくしてしまったように感じた。

障害を持つ母と友人の母と比べ、嫌になるときがある。僕の家では、ご飯を祖母が作っているが、友人の母が作るようなおしゃれな料理はめったに出ない。「おふくろの味」という言葉があるが、母親の作る料理は小学校に上がって以来食べていないような気もする。しかし母がご飯を作る気がないようではなかった。家には、母が若いころ買っていたであろう料理本や、クッキーの型などが置いてあり、母と二人でお菓子作りをしたこともあった。かつて母がしていたことが、今はしていないのではなく、「できない」のだと知った。また、母子手帳や保育園に通っていた時の連絡帳などを見てみると、一日一日の出来事や、育児の様子が手書きでこまめに書かれ

てあった。母の育児での苦労や今では見れない母の手書きの字などから、愛情を注がれていたのだと実感することができた。人とは違う母親だが、僕が知らない裏で頑張っている強い母だと感じた。

母の脊髄小脳変性症のように、できていたことが徐々にできなくなる病気は、できなくなる恐怖や不安が大きく伴うと思う。精神的にも、身体的にも。それらのことと向き合っている母は、とても強いと思う。

脊髄小脳変性症の患者さんに限らず世界中には多くの、障害や病気を持つ患者さんが存在している。僕はまだ健康でいるが将来必ずしも健康のまままでいられるとは限らないだろう。しかし、障害や病気の有無に限らず、だれもが自分らしく生きる権利を持っている。その権利を守るためには、一人だけではなしえないだろう。だからこそみんなが手を取り

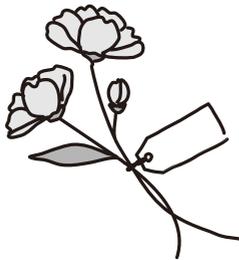
合い支え合うことで、生きやすい社会にするべきではないのか。僕の母ができないことを家族である僕らが助ける。しかし、仕事や学校の両立で、家族だけでは、介護する側が先に潰れてしまいそうになったことがあった。

家族間だけでは解決しきれないことは、ケアマネージャーさんや訪問看護師さんをはじめとする医療従事者の方も助けてくださっている。今僕らが幸せに暮らせていることは、たくさんの助けがあるからこそだと実感できる。

僕の住む街にはスロープや、多目的トイレなどが設置されたバリアフリーな施設が増えてきている。僕ら中学生にはまだまだできることは少ないが、障害の持つ人への偏見や差別をなくし、様々な人とコミュニケーションをとり支えあうなどの「心のバリアフリー」を心がけることはできると思う。ひとり一人の小さな心がけで、誰もが住みやすい街を目

指したい。病気や障害があるからと言って辛いことばかりではない。楽しいこともたくさんある。そう思える社会であってほしい。

僕には障害を持つ母がいる。しかしそのおかげで、多くの人が支えあって生きていることを僕は実感している。人とは違う母だが、病気に負けず向き合い続ける母はとても強く自慢の母だ。



全身で

自分を表現できる社会

新潟市立内野中学校

三年 立石

灯

最近、男女平等という言葉をよく耳にする  
が、その言葉を聞いて思い浮かべるのは私が  
まだ幼稚園に入園する前の出来事だ。

その日、私は入園のための内履きを選んで  
いた。当時私は青が好きで、並んだ赤と青の  
内履きを見てすぐ青がいいと思った。しかし、  
「女の子は赤色で、男の子は青色なんだよ。」  
店員さんにそう告げられた。どうやら指定の  
内履きは女子が赤、男子が青と決まっていた  
らしい。指定されていたならば赤を買うしか

ないのだが、何故「女子だから」という理由  
で自分が好きな色を自由に選ぶことができな  
いのだろうか。そんな疑問を抱いたのは、幼  
稚園のその時だけではなかった。

小学校のランドセルは、六年間ずっと共に  
過ごすものだ。赤と青だけではない。ピンク、  
紫、水色、緑……カタログにはいろいろな色  
が載っていて、その中から自分の色を見つけ  
出すのはとても心が躍る。

私は、大きくなって使える色として濃い  
茶色を選んだ。幼稚園の内履きとは違って今  
回は色の指定はない。だから好きな色を選ん  
でも文句は言わないだろう、と思っていた。  
しかし、入学してから問題は起こった。

「なんで黒いランドセルを使ってるの？」  
クラスの男子に、そう言われたのだ。

それは私のランドセルが他より少し濃く  
黒っぽかったせいだろう。確かに他の女子の

ものももっと明るい色が多かったし、男子が使っているものは黒っぽいものが多かった。

でも、女子が黒いランドセルを使うことや、男子が赤いランドセルを使うことは悪いことなのだろうか？

色は選べるようになったのに、性別によって選んではいけない色があるのだろうか。そんなはずはない、と思った。自分の好きなものを選んだだけで差別されるのは絶対におかしい。自分を正直に表現できなくなったら、それは本当の自分ではなくなってしまう気がする。そんなのはおかしい。

でも、社会では女子は赤、男子は青などという考えが自然に広まっている。そしてそういう固定観念は、気付けば自分の中に芽生えていることがある。私もその一人だった。

小学校高学年のある日、私は地域の活動に参加した。活動の最後に、参加賞が入った袋

を選ぶことができた。中身はみんな同じだが、袋の色だけが違う。ピンクと青。

私は何も考えずにピンクを取った。ただ、心のどこかで漠然と女子はピンク、男子は青を取るんだろうと考えていた。すると、何やら向こうが騒がしい。耳をすませると、男子の声が聞こえてきた。

「お前、なんでピンクを選んでいるんだよ。」  
「どうやら、一人の男子がピンクの袋を手を取ったらしい。聞いてみると、ピンクの袋を取った男子は相手の男子に言った。」

「だって俺、ピンクの方が好きだもん。」  
どくん、と心臓が鳴った。その男子の当たり前の言葉が、何度も頭の中で繰り返された。  
家に帰り、自分が取ったピンクの袋を眺めながら考えた。私も本当は、今でもピンクより青の方が好きだ。でもピンクを選んだ。あの時、なんとなく女子はピンク、男子は青を

取るだろうと思ひ込んでしまっていたからだ。

幼稚園に入る前の内履きも、小学校のランドセルも、その時はおかしいと感じていたのに、いつしか私も固定観念にとらわれていたのだと深く反省した。

そして、男女差別についてももう一度考えた。差別をしたと思っていなくても、悪気は全くなくても、何気ない言葉が相手の世界を窮屈にしていることもあるのかもしれない。考えてみれば、この社会の中で、無意識に発せられた言葉に違和感を感じることはたまにあった。例えば、「男の子なんだから」「女の子なんだから」といった言葉は、自分がかげられたことがある人も多いのではないだろうか。男女差別を根本から無くし、一人ひとりがもっと生きやすい社会をつくるためには、まず「男は、女はこうあるべきだ」といった固定観念を排除することが必要だ。

「男女差別」という言葉を聞くと難しいことのように感じるが、大切なのは性別だけで人を判断しないことだと思う。そして、一人ひとりの小さな心がけが、社会を大きく変えるきっかけになることもあるだろう。

私の通う内野中学校では、今年、制服の変更が行われた。今までは女子は紺スカートとブレザーにリボン、男子は黒い学ランと決まっていたが、来年からは男女共にブレザーになり、リボン、ネクタイ、スラックス、スカートを自由に選択できるようになる。

自分の好きなものを性別関係なく自由に選ぶことができる社会。全身で自分を表現できる社会。そんな社会を実現するために、まずは私自身が、自分の行動を見直し、偏った考えで発言をしないように気をつけていきたい。

## あなたの道

粟島浦村立粟島浦中学校

二年 氏名非公表

皆さんは「自分なんて、死んじゃえばいいのに……。」と思ったことはあるだろうか。思ったことがある人も中にはいるかもしれない。

ある日テレビを見てみると、小学六年生の女の子が自殺したというニュースを見た。理由はいじめだ。理由を知ったとき、過去の自分と重なった気がした。「なんで諦めたの。」そんな思いが頭をよぎった。でも、気持ちちはわかる気がする。私もその辛さを経験したこ

とがあるからだ。

私は、小学五年生でいじめを経験してから、自信をなくした。一步も学校に行かなかったというよりかは行けなかった。先生やクラスメイトに会うのが怖かった。もちろん、友達なんていなかったし、遊んだこともなかった。大人数で遊んでる人たちを見ると、羨ましくてしよすがなかった。町中に出て、学校の人たちと遭遇すると、私の方を見てコソコソと笑っているのが聞こえる。過去の記憶が蘇ってしまう。「もう嫌だ、消えてしまいたい」と思う日は数え切れないほどあった。辛い小学校生活だった。それでも私は「いつか、きくと笑える日が来る。」そう信じて友達との間で感じる「楽しさ」というものを待った。でもそのまま、卒業する時期にまで来てしまった。

そんな中、担任の先生から電話がかかって

きた。「一日だけでも学校に来てみないか」と。でも、心のなかではすでに決心がついていた。「行きません。」しかし、先生には、その気持ちを受け入れてもらえなかった。「どうせ学校をサボりたいだけなんだろう。」その言葉に、怒りと悲しみが同時に押し寄せた。私は、何も言えなくなってしまう。しばらくすると、電話は切れた。私は何も話さないから飽き飽きしたのだろう。私は、そのままスマホを見つめていた。「なんで……なんで、苦しいのに助けてくれないの。なんで、辛さをわかろうとしてくれないの……なんで私は普通の人と同じ道を辿れないの。」そんなことを思いながら、小学校生活は終わった。

結局あのあと、学校の敷地には一切入らなかった。卒業式にも出なかったし、卒業アルバムも持っていない。顔写真だって載ってない。全てで自分自身で決めたことだ。なぜなら、

クラスメイトの顔を忘れたいから。小学校生活を送り出したところで、いいことなんて一つもない。ただ、辛くなるだけだ。でも、逆に考えてみればやっと解放される。中学校は遠く離れたところに行くから小学校の人たちとはもう会わなくて済むんだ。この悲しみ苦しみからやっと解放されるんだ。そう思うと、気持ちが少し楽になった気がした。あのときと同じ事になったらどうしよう、と不安になることもあったが、「きっと大丈夫」と自分に言い聞かせて自分自身を勇気づけた。

そして、あっという間に入学式がやってきた。私は、スカートの裾を握りしめながら緊張と期待を背負って入学式を迎えた。入学式では初めて会うクラスメイトがたくさんいた。実際に新しいクラスメイトや先生と中学校生活を送ってみると、今までには一度も感じたことがなかった友達や先生と一緒にいる「楽

しさ」が感じられた。「友達ってこんなに大事なものなんだ」と日々を過ごしていくうちに分かった。時には友達と笑ったり泣いたり、喧嘩したり悔しがったり……私にとって初めてのことばかりだった。

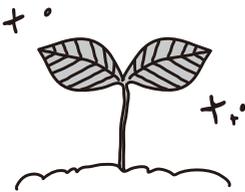
その時、初めて「生きていて良かった。」と思った。あのときは、生きる希望の光もないと思っていた。でも、こうして皆で笑える日が来た。自分の中で友達というのは「苦しみ」から「宝物」にいつの間にか変わっていた。そして、世界にはまだ生きる希望の光すら見えない人がたくさんいる。私は、その人達に伝えたい。

想像してみても、明日、明後日、数年後を。

何が見えるだろう、これからやりたい事、たくさん出てくるかな。たとえ、今出なかったとしても、いつの日か一筋の光が差し込むまで、心の奥に溜めておくのもあなたの自由。

今、わからなかったとしても、自分で決めたことがあるはず。それはきっとあなたの代わりにはできない。その時が来たら、胸を張っていいんだよ。いつか笑える日が来たら、自分のことをちょっと好きになれるから、それまで、諦めないで。今、苦しくても孤独でも辛くても。みんな、道は同じじゃない。他の人と同じものを持ってなくていい。同じ道を辿らなくてもいい。ゆっくりでもいい。歩幅を広げて歩き出そうよ。

あなたはあなたの道を行けばいい。



## 誰もが輝ける社会に

長岡市立青葉台中学校

三年 楳<sup>うめ</sup>田<sup>だ</sup> 晴<sup>はる</sup>

女子野球を通して男女差別がなくなっ  
てほしい、今の私の願いだ。

小学五年生の春、私は親の影響で野球を始めた。女子チームはなかったため、男子に混ざって活動していた。最初は男子と一緒にやることへの不安もあったが、男子に負けたくない一心で練習をし、翌年には男子に負けな  
いほどの実力を身に付け、副キャプテンに  
ま  
で上りつめた。

そんな私が男子との差を感じ始めたのは中

学に入ってからだ。互角に張り合っていた男子は成長期を迎え、筋肉が付き、パワーが増し、体格がどんどん大きくなっていった。技術面や野球のセンスは男子にも負けない自信があったが、肉体的な面では自分がどれだけトレーニングしても男子に勝つことはできないかもしれないと焦る自分がいた。実際、ほとんど差のなかった球速は私よりも遙かに上回り、打球のスピードも速くなりものすごい打球が飛んでくるようになった。男女でこんなにも差が出てしまうことへの悔しさや、女子が男子に埋もれていってしまうのではないかと不安も感じるようになってきた。

ある日家族と進路について話す機会があった。学業を優先し市内の公立高校に進むとすると、男子に混ざって野球をすることになる。しかし、女子は練習試合への出場は可能だが公式戦への出場は禁止されているのだ。公式

戦に出れないということが自分の中でずっと引っかかっていたし、一人のプレーヤーとして、公式戦に出たいという気持ちはやっぱり強かった。野球を優先して、女子硬式野球部がある高校へ行く選択肢もあったが、私はその選択をするかどうかすぐく悩んでいた。

男子と違って将来性がない女子野球。野球は大好きだけど将来性のない女子野球を続けることに意味があるのだろうか、と自分の中で色んな気持ちがあぶつかり始めていたのだ。男子は甲子園という夢舞台がある。たくさんの人から注目されて、活躍すればプロの道へ進めるかもしれない。野球で食べていける可能性を誰もが持っている。しかし女子はどうだろうか。女子も男子と同じように硬式野球部や全国大会がある。それなのに、テレビでは放送されずニュースにもならない。そしてプロへの道も今は絶たれている。一生懸命プ

レーしている姿を映し出してくれない。女子野球は世間から興味をもってもらえず注目もされないのだ。注目されるとしても優れた一部の選手だけ。女子野球も男子と同じように盛り上がって欲しいのに、なぜ性別の違いだけでこんなにも差が生まれてしまうのだろうか。これもちゃんとした男女差別だと思う。

男子は毎年甲子園という夢舞台で野球ができるのに女子は違う。一昨年にやっと決勝のみ甲子園で試合をすることが許されたのだ。甲子園で楽しそうにプレーをする姿、全力で応援をする姿、それを毎年見る度に羨ましさと同時に悔しさが溢れ出してくる。

一八七二年に日本に野球が伝来してから様々な進化を遂げて、現在まで受け継がれてきた。甲子園やオリンピック、WBCなどを通して今までよりもたくさんの人に野球に関心をもってもらえた。それでも女子野球に興

味をもってもらえないのは、男子よりも面白くないという勝手な偏見を持ち、女子野球の魅力に気付かない人が数え切れないほどいるからだと思う。

私は今年、県選抜に選ばれて県内の女子選手と約二ヶ月間同じチームで野球をした。ヒットを打ち、ダイヤモンドを駆け回る姿に「カッコいいよ。」と叫ぶ。また、どんなときも笑顔で常に雰囲気は明るい。さらに、男子に負けないくらいの気迫あふれるプレー。私の経験上、男子とやっているだけでは見られないような光景ばかり。「女子野球にも素晴らしい魅力がたくさん詰まっているんだぞ。」女子野球の魅力に気付かないたくさんの人達にそう叫びたい気分だった。また、女子と共に野球をしてこの先も野球を続けたい、そしてプロ野球選手も目指したいと思った。私の他にもこのように思っている女子選手は

たくさんいるはずだ。男子がプロ野球選手になりたいと思うように、女子もプロ野球選手になりたいと思うのだ。こんな素晴らしい夢をもった女子達がいることをもっとたくさんの人達に知ってほしいと同時に、その夢を叶える場所がないという女子野球の現状も知ってほしかった。

日本に昔から存在する男女差別。政治や仕事、スポーツなど様々な場所で男女差別がみられ、今もなくなっていない。この男女差別が女性をもつ大いなる可能性を踏みにじっているとは私は思う。女子には男子にはない考えや能力、魅力がたくさんある。男女が互いのことをよく理解し、認め合い、互いに手を取り合っていくことでより良い社会へと繋がっていくのではないか。女子野球の発展もその一つだと思うし、それが男女差別がなくなるきっかけとなることを祈っている。

審査員特別賞

「知る者が守る」

魚沼市立湯之谷中学校

三年 氏名非公表

私がこの作文を書くに当たって「人権」について考えたときに、保育園の時の体験が思い浮かびました。今考えるとあれは人権侵害だったのではないか、だとしたら、許せない行為だったのかもしれない、という気がします。

私に通っていた保育園は、家のすぐ近くありました。大きくて強そうな木が生えていて、花壇にはパンジーの花がたくさん咲いていて、「グミの実」というおいしい実がなっていて、

自然豊かな優しい雰囲気の間所でした。

でも、先生は優しくありませんでした。私の先生はとても厳しく、毎日誰かが必ず怒られていました。今思えば理不尽な怒られ方ばかりでした。

私は小さい頃、ご飯を食べるのがとても遅くて、家でもいつもびりっけつで、一緒に「いただきます」をするのに、「ごちそうさま」はひとりぼっちでした。そんな私に先生は「なんでこんなに食べるのが遅いんだ。」と怒り、最終的にご飯に味噌汁をかけられ、「こうやって食べなさい。」といました。「ごめんなさい。」と謝ることしかできなかった私は、お昼ご飯の時間になりました。今は食べるのが早くなりましたが、今でもご飯を食べることがあまり好きではありません。お昼寝の時間も嫌いました。先生は寝ないと怒ります。寝ない子はよく廊下に布団ごと

引きずり出されていました。私はなかなか寝られませんが、でも起きていると怒られるから、まぶたを閉じてじっとしていました。ある日、寝たふりをしてしていると珍しくうとうととしてきて、そのまま寝てしまいました。お昼寝の時間が終わりと起きると、そこは廊下でした。

「私はちゃんと寝たのに何でだろう？」そんな疑問が一日中頭の中に浮かび、心がモヤモヤしていました。

私は小学校に入学してから放課後児童クラブに行っていました。夏休みにはそこでも保育園と同じようにお昼寝の時間がありました。その時の先生は私に「寝なくていいから、他の子が寝られるように静かにしててね。」と言いました。私はその言葉にとでもびっくりしました。昼寝ができないのは悪いことだと思ってきたからです。でも、保育園とは違い、寝なくても怒られないし、寝られない子のと

ころには、先生がやってきて、背中をトントンしてくれました。

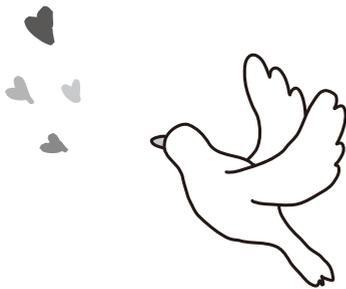
大きくなってわかったことは「私は悪くなかった。」ということ。食べるのが遅いのも、なかなか寝付けないのも、悪いことじゃないということ。それに気づけなかったのは、私はまだ小さかったからです。「人権」を知らなかったからです。だから私は、家族にそのことを言わなかったし、言うべきだとも思わなかったのです。

「人の諸権利についての無知、忘却あるいは軽視が公共の不幸と政府の腐敗の諸原因であるに他ならない」。学校で読んだフランス人権宣言に書いてあった言葉です。人権を知らない小さな子どもにも人権があります。でも、知らないから「私は人権を侵害されました。」と発言することはできません。だからこそ、私たちが守らなければいけません。

私はずっと大人を「正しい人」だと勘違いしていました。でも、大人の言うことがみんな正しいわけではないし、誰かのいうことがみんな正しいなんてこともないのです。私には私なりの正しさを信じる権利があります。最近成長したなと思うのは、大人の言うことに「ん？それは違うんじゃないか？」と考えるようになったことです。大人の言うことを、なんでもかんでも鵜呑みにしないで、一度自分で正しいのかなと考えることが、自分の権利を守ることに繋がると思います。

この作文は、なかったことにされるかもしれませんが、と少し不安です。実際保育園の話も、ずいぶん前の話なので、私が少し大げさに記憶しているだけかもしれない。でも、傷ついたのは事実です。私には「発言する権利」があります。なかったことにされるのはそれこ

そ人権侵害です。子どもにだっておいしく食べる権利、好きなときに寝る権利、保育園で楽しく過ごす権利がある。それは一人の間として当たり前を持っていて、当たり前を守られる権利である。それを言えない子どもだからこそ、大人が守らなければいけない”私のメッセージが多くの人に届くことを願っています。



## 未来のために

新潟市立下山中学校

三年 矢野 希のぞみ

私は何度かはじめのようなことをされたことがある。小学四年生の時、紙に悪口を書かれたり、中学校に入ってからはランチのマークシートを破られたりした。しかし、私もっと怖いことを経験した。

私は今年、靴に画鋲を入れられた。体育祭準備の放課後活動が終わり、一人で靴を履き替えて帰ろうとした時、靴の中に何かが入っているのがわかった。靴の中に画鋲が入っていた。その日は、いたずらかなと思ったため、

先生に言わず、次の日の朝に伝えた。しかし、次の日SNSの匿名の質問箱で画鋲を入れたであろう人から私を狙ったことがわかる内容のメッセージが送られてきた。休日だったが、学校のタブレットを使って先生に連絡をした。私を狙ったとわかってから靴を履くのが怖くなった。休み明けに学年集会が行われ、あった出来事を先生が話してくれた。教室に戻ってから担任の先生がクラス一人一人にこの出来事についてどう思うかを聞いた。「どうしてそんなことをするのかわからない」「迷惑がかかるからやめてほしい」「かわいそう」中には涙を流してくれている人もいた。私はいじめられた被害者としてみんなの意見を聞いて安心した。

私はたった一回のこの出来事で驚くほどの恐怖を感じた。この恐怖を感じた時、長い間いじめられ続け、誰にも相談できずにいる人

はどれだけ辛いのだろうと思った。なんとなくいなくなりたくなる気持ちがわかった気がした。それと同時に怒りが湧いた。言いたいことがあるなら言いにくればいい。そう思った。しかし、自分の行動をもう一度見直そうと思った。もしかしたら、相手が嫌な思いをする言葉を言っていたり、行動をしていたかもしれないと思った。

最近、学校内でのいじめやSNSを使った誹謗中傷のニュースをよく見る。被害者の中には自ら命を絶ってしまう人もいる。文部科学省が出した二〇二二年の小学校、中学校、高等学校の児童生徒の自殺者数は五一二人で過去最多を更新している。しかし、自ら命を絶つ理由として最も多いものは「将来への不安」だという。ニュースでは、いじめや誹謗中傷によって命を絶ったという報道はよく聞かすが、将来に不安を感じて命を絶ったという

報道は聞かない。だから、私は情報を共有できる環境・場面が必要だと思う。自分と同じ悩みを抱えている人がいることがわかると少し安心できると思う。また、こんな悩みを抱えている人もいるんだと思うことができれば、もっと多様な価値観を持てる。そして、気軽に相談できるようになるべきだ。いじめについての相談だけでなく、進路や家庭に関する相談ももっとしやすくなってほしい。

私は一人で抱え込む。両親や先生に「相談してね」と言われてもなかなかできない。言いたいことはたくさんあっても、どう思われるかわからないからだ。しかし、学校で定期的に生活アンケートや教育相談があり、時間をかけて話を聞いてくれるため、あまり抱え込むこともなくなった。担任の先生以外でも相談のしやすい先生や友達がいる。学校を休むと、先生から電話があったり、友達から心

配してくれる連絡が来たりした。相談をしなくても心配してくれているのがわかるだけで安心すると私は思う。私は中学校三年間でこの環境のありがたさを実感した。

私は担任の先生がクラスのみんなにどう思うかを聞いた時、気づいたことがあった。いじめられた人のことは「怖かったと思う」とか「かわいそう」とか寄り添う言葉が多かった。それに比べていじめた人に対しては「どうしてこんなことをするのかわからない」「迷惑だからやめてほしい」といった突き放した言葉ばかりだった。私はいじめられている人を助けるとともに、いじめている人も助けべきだと思う。いじめられた人からすれば、いじめてきた人は許せないと思いかもしれない。そう思うのもよくわかる。しかし、いじめている人も抱えきれないほどの悩みがあり、誰にも相談できないからいじめてしまう。そ

うだとしてもいじめをしていいわけではない。だから、もっと相談しやすくなってほしいと思う。

「人権」とは世界中のどんな人も一人一人が持っている。「人をいじめた人に人権はない」そんな言葉さえなくなるように私たちは常に互いを尊重しなければいけない。私たち個人が世界を変えることはできない。しかし、周りの人を気遣うことはできる。小さなことかもしれない。それでも続けていけば一人でも多くの人が個性豊かに、自由に、生活できるようになる日はいつか来ると私は思う。

「未来のために」ひとつずつ



## ありのままの自分へ

新潟市立白根第一中学校

一年 田中優里

私の右頬には、大きな茶色いアザがある。そのアザは、酷くケガをしてできた跡ではない。私の生まれつきのアザだ。それを、「扁平母斑」という。生まれつきながらも、アザの名称を私は最近知った。

扁平母斑とは、メラニン色素がある一つの部位に集中して増殖してしまったところのことをいう。私の場合、メラニン色素がたまたま右頬に大きく集中してしまっただけだ。

扁平母斑をもって生まれた私は、一歳に時

に、全身麻酔をして扁平母斑をなくすための治療を受けた。それも、二回だ。二回受けた理由は、一回目の治療で効果がなかったからだ。だが、二回目の治療でも効果がでることははなく、少し色が薄くなった程度に留まってしまった。

私は治療が成功まで届かなかった年の翌年から、小学校に上がる前の年まで、レーザー治療を得意とする病院へ、年に何度か通っていた。私はそのころの記憶を鮮明に覚えている。その病院は東京にあったので、毎回お母さんと新幹線に乗って病院に行った。レーザーはすごく痛かった。私は毎回心の中で、「絶対今年は泣かないんだ。だって、前より少しお姉さんになったんだから。強くなってるはずだから。」

そう言い聞かせていた。でも、必ず泣いた。泣かなかった時なんてなかった。今このこと

を思い出すと、なぜか悔しい気持ちになる。

治療が終わったあとは、右頬にすぐく大きなガーゼをしばらく貼っていた。そしてもちろん、ガーゼを貼りながら保育園にも行った。

私は生まれつきのアザなので、保育園の友達は見慣れていた可能性もあるが、みんなが心配してくれたただけで、他にアザについて気にしている様子はなかった。

私は小学校に入学した。それまでレーザー治療に毎回痛い思いをしながらも通っていたが、アザをなくすことは出来なかった。あんなに頑張ったのに。私は目の前が暗くなった気がした。なので、もう東京まで治療を受けに行くことをやめた。そのかわり、今でも右頬の扁平母斑は残っている。

小学校低学年の時だった。私は友達に、「そのアザって、生まれつきだったんだ！今まで私、絵の具で顔に描いていたんだと

思ってた！」

と言われた。私的に、その子自身は私のアザの理由をわかりながら話しかけてきている気がした。その言葉を言われた瞬間、何かがズキッと、心を突き刺しているような感じがしたのだ。当時は「いじめ」だとは思っていなかったが、今思えば、「人権被害」なのではないかと思う。とにかく心の底に落ちていつている感覚だった。私にしかわからない人権被害だと思い、その日からアザのことを自分の「コンプレックス」だと考えてしまっただけで顔を見られることですらイヤになってしまった。でも、みんなの前ではイヤな気持ちを表さず、もやもやしたまま小学校生活を過ごしていた。高学年になると、私のアザについてみんなは気にしなくなっていた。ほっとしたが、まだ私の心のキズは残っていた。それも、すぐく深く残っていた。

私は中学校に入学した。やっぱり、今までとは全く違う世界に入ると、右頬のアザについて聞かれるものだ。わかっていた。でも、怖かった。また人権被害に遭ってしまわないか、と。私は部活で一緒になった子と、仲良くなった。アザについて聞かれたので、生まれつきのアザだと、いつも通り、正直に言った。すると、思ってもいなかった返事が返ってきた。

「生まれつきなんだ！いいな。」

私はすごく驚いた。動揺しながら、なぜか聞いてみた。すると、

「だって、そのアザと同じものは誰ももっていないんだよ！自分らしさっていいじゃん。」と。

私はその友達に気付かされた。「個性がどれだけ大切か」ということを。今までコンプレックスだと思っていた右頬のアザへの気持ち、急に晴れ晴れとしたのだ。私はそう言

われた瞬間、心の中で涙を流していた。こんなことを自然と言ってもらえるなんて、思っていなかったのだ。この友達は、私の人権被害から救ってくれた、心友なのだと思った。

人はみんな違う。全く同じ人なんていないのだ。一人一人が生まれもってきたものすべてを「個性」という。自分では後ろ向きに捉えていたことが、実はすごく大切な個性かもしれない。平和な人権の世界をつくるためには、みんなの個性を認め、自分の個性も認めることが大切だと思う。

私は、ありのままの自分であることを、決心した。



## 誰もが話しやすい環境を

新潟県立佐渡中等教育学校

二年 中<sup>なか</sup>村<sup>むら</sup>虹<sup>こ</sup>湖<sup>こ</sup>

私には、幼稚園から小学校を卒業するまでの、十年もの時間を共に過ごした大切な友達がいる。普段は勉強したり、楽しく遊んだりできるが、人前で話すことが苦手な子だ。話を始める際に、言葉の頭の音を繰り返したり、音が引き伸びたりと、つかえずに話すことが難しいらしい。

小学校に入学してすぐに、その子は「ことば・こころの教室」という場所へ通っていた。そこで何をしているのか気になった私は、そ

の友達に尋ねてみた。すると、その子は笑顔で話してくれた。二人きりで話すことはできるが、三人以上になると緊張して言葉が詰まってしまうこと。みんながいても話せるようになりたくて、その教室で練習していること。いつか、クラスみんなの前で、つかえずに話せるようになりたいという目標まで教えてくれた。自分の苦手を乗り越えようと努力していることを知った私には、その友達が輝いて見えた。

小学三年生の頃のことだ。その友達がクラス男子たちにからかわれていた。何があったのだろうと近づいてみると、

「なんでいつも普通に喋れないの？」

という言葉が聞こえてきた。必死で言い返していたのだろう。その子の目からは涙があふれていた。その光景を見た私は、頭の中が真っ白だった。何もすることができず、ただ

見ていることしかできなかった。

その日の夜、私は一人考えた。あのとき私はどうすれば良かったのか。なぜ、あんなことが起きてしまったのか。

きっと、からかっていた男子たちの中に、「いじめよう」という考えはなかったと思う。ただ上手く話せていないことをバカにして、それをからかい、おもしろがっているように見えた。もし、私が同じようなからかいを受けたら、きっと私もあの子のように、泣いてしまうだろう。また、人前で話すことに恐怖を抱き、臆病になってしまおうと思う。

そして、私はあることに気がついた。からかっていた男子たちは、あの子のことをよく知らないのかもしれない。私は、その子が話すことが苦手だと知っていたため、話し方に違和感を感じたことはなかった。しかし、もし彼らがそのことを知らずにいたとしたら、

変だと感じるかもしれない。「知らない」とかで、あんなふうに誰かを傷つけているのかもしれないと考えると、それを他人事として捉えてはいけないと思った。

この作文を書くにあたり、その子の症状について調べてみた。そして「吃音症」というものがあると知った。また、「吃音症のある人に対して、私たちは話をゆっくり聞くこと話しやすい環境をつくるのが大切」というようなことが書かれてあった。「ゆっくり聞く」ことで、相手は話しやすくなることを知り、私は少し安心した。

また、吃音がある人、ない人に関係なく、誰もが話しやすい環境をつくりたいと思った。私のクラスでは、授業中にみんなの前で、意見を発表する場面がある。人前で話すことが苦手な子が前へ出ると、温かい雰囲気だった教室が一変し、冷たい視線がその子に集まる。

そして、誰も何も声を出さない沈黙の時間が続く。これが、私のクラスの現状だ。話しやすい環境をつくるためには、まず、温かい雰囲気をつくる必要があると思う。そのために、できることが二つある。最後まで話ゆっくり聞くこと。そして、相手をよく「知る」ことだ。これらを心がけて過ごし、自分のクラスをより良くしたいと思う。

この世界に誰ひとりとして同じ人間はいない。そして、全ての人が自分らしく生きる権利を持っている。

誰にでも得意なこと、苦手なことはあるし、その人にしかできないことだってある。それが個性だ。誰もが自分らしく輝けるような社会を創っていくためには、一人一人の個性を尊重し、互いに助け合っていくことが大切だと思う。

私も、自分の個性、周りの人の個性を大切

にして、助け合いながら、私らしく強く生きていきたい。



## 見た目で決めるな

佐渡市立松ヶ崎中学校

一年 中<sup>なか</sup>村<sup>むら</sup>太<sup>た</sup>一<sup>いち</sup>

僕は今でもその子に謝りたいと思っています。それは遡ること二年前。ある日学校に行くと僕の隣に新しい机が置いてありました。転校生が来るのだとすぐに分かりました。どんな子なのかクラスメイトの子も僕もワクワクしていました。しかしそこに来たのはフィリピンの学校から転校してきた子でした。そのA君は自分よりひとまわり大きかったし、肌の色や目の色が違いました。そのため、最初に見たときは思っていた人とは少し違って

いて正直がっかりしました。内面、「同じぐらの背丈の面白い子がいいな」と思っていました。しかし、月日が経つにつれA君と僕はだんだん仲が良くなっていききました。A君の外見は少し怖かったけど、性格はとても面白くて一緒にいると楽しい子でした。毎日くだらない会話も沢山したし、少し悪ふざけをしたこともありました。本当に毎日が楽しくかったです。

それから三ヶ月程たったある日、事件が起こりました。僕が学校につくとA君とB君が喧嘩をしていました。それも口喧嘩などではなく、お互い取っ組み合いになるような激しい喧嘩でした。すでに、三人程止めにかかっていましたが、先生が来るまで全く止めることはできませんでした。先生から話を聞くと、B君がA君に「お前の肌の色黒くてキモイ」や「お前変な臭いする」など、A君を侮

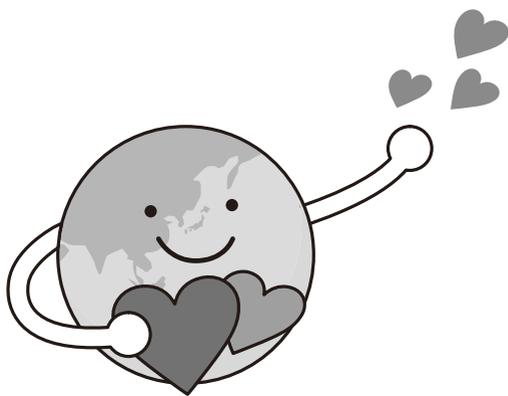
辱するようなことを言ったことが原因でA君がB君に手を出して喧嘩が始まったということが分かりました。僕は正直、先に人のことを侮辱したB君が悪いと思いましたが、しかしクラスの反応は違っていたのです。B君は、いつもクラスの中心にいる人気者でした。そのせいなのか、クラスは先に手を出したA君が悪いという雰囲気になりました。A君とB君はぎこちない仲直りをしましたが、この事件をきっかけに、クラスの大半がA君に対して悪い印象を持つようになりました。さらには、A君を無視する人まで出てきたのです。僕は、意味もなく人を無視することはとてもヒドイことだと思えます。「あいつも無視しているから俺も無視しよう」と最初に無視し始めた子から次々に無視する子や避ける子が増えていきます。僕はそれに気づいていました。同じ人間なのに、自分たちと少し違う

だけで、そんなことを言っただけはいけないことも僕は分かっていました。しかし僕は分かっていたにもかかわらず自分がみんなから避けられることを恐れ、無視されることを怖がり、A君に声をかけてあげることができませんでした。そのことを本当に謝りたかったです。しかし、「明日こそ謝ろう、明日こそ謝ろう」と言いつつ結局謝ることができませんでした。「ごめん」と一言伝えることがこんなにも難しいことだと、この時初めて知りました。それから数か月後、僕はほかの学校に転校してしまいました。もうA君とは会えなくなってしまうました。もう一度だけあと一回だけでいいからA君に会いたい。そして、もしもう一度だけA君に会うことが出来たのならA君にこう伝えたいです。「あの時は話しかけてあげられなくてゴメンな。」と。

この経験から、僕は学んだことが二つあり

ます。一つ目はいじめの怖さです。集団でいじめられるととっても怖いのです。だからこそ以前のことを反省して、いじめられている人、少しでも何かちょっかいを出されている人がいたら、見て見ぬふりをせず自分にできる限りのことをしてあげたいです。二つ目は外見のことについてです。以前A君のことを「A君って肌の色とか目の色とか普通じゃないよね」と笑っている人がいました。僕はその発言は間違っていると思います。確かに僕たちとはいろいろ違うところがあるかもしれませんが、しかし、普通じゃないわけじゃないです。A君が住んでいたのはフィリピン。フィリピンではその肌の色や目の色が普通かもしれない。だからこそ、自分の価値観で人の見た目を普通とか、普通じゃないとか決めつけるのはよくないと思いました。これから、外見のことで嫌なことを言われ、困って

いる人がいたら、自分にできることを全力で協力して、助けてあげたいです。



## 心の中の「部屋」

魚沼市立広神中学校

三年 佐野 心こころ

人権が脅かされる時とは、どんな時でしょうか。いじめを受けた時、差別された時。しかしそれらの大きな問題に発展して初めて、人権が脅かされたと言うべきではありません。私は「人権」を権利であると同時に一つの「スペース」や「部屋」のようなものだと思っています。パーソナルスペースという言葉があります、それと同じように、一人一人が自身の観点をもとに広さを持っているのです。人権の迫害はその部屋に勝手に入られ

てしまうこと。部屋が少しずつ狭くなり息ができなくなってしまうこと。そこから人を助けようとしても難しいかもしれません。どれだけ小さなことでも、自分や相手の心の違和感に気づくことが大切です。

また、部屋の例えをもとにすると言葉は部屋の「カーテン」のようなものだと考えられます。たった一言で人の心を明るくもでき、暗くもできる。言葉とはそれほどの影響力を持ったものなのです。だからこそ、使い方は常に慎重になる必要があります。

「自分がされて嫌なことは、人にしちゃいけないよ。」

この言葉を、誰もが幼い頃に一度は言われたことがあるのではないのでしょうか。私自身、両親にも保育園の先生にもくり返し言われた覚えがあります。相手の気持ちを自分のことのように考えなさいという、子どもの思

いやりの心を育てるためとしてもとても良い教えだと思えますが、同時にほんの少しのずれを感じます。思えば、そのずれを私は幼い頃既に感じていたのかもしれない。

小学校低学年くらいの頃、外に出て植物や虫をスケッチするという授業がありました。私は友達の描いた絵を、

「面白いね！」

と言ってしまいました。何気ない一言でしたが、しばらくしてそれが言っただけではないことと違ったのだと気づきました。私はその瞬間まさに、カーテンを閉め友達のことを暗くしてしまっただかと思えます。表情からも傷ついているのがすぐにわかりました。私はどうして、と取り乱すばかりでしたが、後になって考えればその理由が見え始めてきました。私があるね、楽しい絵だねと言われているよ

うで嬉しかったでしょう。しかし、相手は面白いという言葉で「楽しい」というより「変だ」と言われたようなマイナスな解釈をしてしまっていたように思います。

自分がされて嫌なことは、人にしない。この言葉から感じたずれは、自分がされて嬉しいことでも相手にとっては同じように嬉しいとは限らない、ということ。自分の考えに沿って発言している、結局相手を思いやることには繋がりません。本当に大切なのは、相手ならどう感じるだろうかと一番に考えることです。人にはそれぞれの価値観があります。それらは再び部屋の例えを用いると、部屋の「広さ」であったり「形」として表せます。相手の特性や考えを認め尊重しながら、自分の立場から相手を見るのではなく、相手の立場に立つ。とても難しいことですが、それこそが私たちが本当にやっていく

べきことだと思えます。

そして、私自身も一つの目標があります。どうしたら相手を傷つけないか、ではなく、どうしたら相手を喜ばせられるかという考え方をすることです。私は小学校での経験以来自分の言葉には気をつけていますが、その反面、気持ちの明るい側面に目を向けられていないと感じます。言葉は強悪な武器にもなるとても恐ろしいものです。だからこそ、言葉を持つ本来の役割、人を笑顔にすることに使っていきたいと思えます。

人が人らしく、幸福な生活をしていく権利。そんな人権を守るため、一人一人が少しずつ相手に寄り添っていくことができれば、今人権の侵害に悩まされる人たちが笑顔で暮らせる日が来ると信じています。



令和5年度 全国中学生人権作文コンテスト 新潟県大会入賞作品

応募総数 県内 184 校 9,155 編

賞	学校名	学年	氏名	題名
新潟地方法務局長賞	かしわざしりつだいさんちゅうがっこう 柏崎市立第三中学校	3年	しなだれな 品田玲菜	「それだけで」
新潟県人権擁護 委員連合会会長賞	にいがたけんりつつなんちゅうとうきょういっがっこう 新潟県立津南中等教育学校	2年	すずきしずく 鈴木雫月	受け入れる
新潟県教育委員会 教育長賞	にいがたしりつひがしにいがたちゅうがっこう 新潟市立東新潟中学校	3年	やまぐちひかる 山口光	僕の母親
新潟日報社賞	にいがたしりつちのちゅうがっこう 新潟市立内野中学校	3年	たていしあかり 立石灯	全身で 自分を表現できる社会
NHK新潟放送 局長賞	あわしまうらそんりつあわしまうちゅうがっこう 粟島浦村立粟島浦中学校	2年	非公表	あなたの道
アルビレックス 新潟賞	ながおかしりつあおばだいちゅうがっこう 長岡市立青葉台中学校	3年	うめだはる 楳田晴	誰もが輝ける社会に
審査員特別賞	うおぬましりつゆのたにちゅうがっこう 魚沼市立湯之谷中学校	3年	非公表	「知る者が守る」
優 秀 賞 (以下順不同)	にいがたしりつしたやまちゅうがっこう 新潟市立下山中学校	3年	やののぞみ 矢野希	未来のために
優 秀 賞	にいがたしりつしるねだいちゅうがっこう 新潟市立白根第一中学校	1年	たなかゆうり 田中優里	ありのままの自分へ
優 秀 賞	にいがたけんりつさどちゅうとうきょういっがっこう 新潟県立佐渡中等教育学校	2年	なかわらこ 中村虹湖	誰もが話しやすい環境を
優 秀 賞	さどしりつまつがさきちゅうがっこう 佐渡市立松ヶ崎中学校	1年	なかわらたいち 中村太一	見た目で決めるな
優 秀 賞	うおぬましりつひるかみちゅうがっこう 魚沼市立広神中学校	3年	さのこころ 佐野心	心の中の「部屋」
優 良 賞 (以下順不同)	にいがたしりつかみやまちゅうがっこう 新潟市立上山中学校	1年	えはたゆかり 江端祐香里	曾祖母の涙
優 良 賞	にいがたしりつしたやまちゅうがっこう 新潟市立下山中学校	3年	ふくだひな 福田陽菜	私の『個性』って何？
優 良 賞	にいがたしりつひがしにいがたちゅうがっこう 新潟市立東新潟中学校	3年	さいとうひなせ 斎藤妃那世	勇気と自信
優 良 賞	ながおかしりつみやうちゅうがっこう 長岡市立宮内中学校		非公表	気づき、 そして勇気をもつこと
優 良 賞	ながおかしりつひがしちゅうがっこう 長岡市立東中学校	2年	ふなやまはるか 船山遙花	正義
優 良 賞	ながおかしりつとうほくちゅうがっこう 長岡市立東北中学校	2年	非公表	友達の大切さ
優 良 賞	かもしりつあおいちゅうがっこう 加茂市立葵中学校	2年	ひがりおん 比嘉璃音	「個性」を受け入れて
優 良 賞	つばめしりつつばめちゅうがっこう 燕市立燕中学校	3年	あべことね 阿部心音	発達障がいと向き合う
優 良 賞	かもしりつあおいちゅうがっこう 加茂市立葵中学校	1年	あさひまさひろ 朝日誠大	「遊び」が「いじめ」に ならないために

賞	学校名	学年	氏名	題名
優良賞	かしわざきしりつだいごちゅうがっこう 柏崎市立第五中学校	3年	さかい さき 坂井早紀	ネットの向こう側
優良賞	かしわざきしりつだいさんちゅうがっこう 柏崎市立第三中学校	3年	かわら まいな 河原舞名	「過ごしやすい社会」
優良賞	たいないしりつなかじょうちゅうがっこう 胎内市立中条中学校	3年	はや みゆづき 速水優月	思いこみが招く誹謗中傷
優良賞	しばたしりつしうんじちゅうがっこう 新潟市立紫雲寺中学校	3年	こばやし のあ 小林希愛	話すことで
優良賞	たいないしりつなかじょうちゅうがっこう 胎内市立中条中学校	3年	わたなべ ことろ 渡辺虎太郎	無意識の差別
優良賞	にいがたしりつつきがたちゅうがっこう 新潟市立月潟中学校	2年	なか じょうあいら 中条愛夢	人は何回でも変わる
優良賞	にいがたしりついつだいいちちゅうがっこう 新潟市立新津第一中学校	2年	むら やまかほ 村山華穂	一人ではない
優良賞	にいがたしりつはくなんちゅうがっこう 新潟市立白南中学校	3年	おお つきゆうき 大槻侑生	強く、強く生きるために
優良賞	とおかましりつかわにしちゅうがっこう 十日町市立川西中学校	3年	や えざわゆめか 八重澤夢叶	コンプレックスを 克服して分かったこと
優良賞	とおかましりつなかさとちゅうがっこう 十日町市立中里中学校	2年	きら しん 吉楽心	生きるってどんなこと
優良賞	むらかみしりつあらかわちゅうがっこう 村上市立荒川中学校	2年	さい どうあゆ 齋藤愛結	本当の笑顔
優良賞	せきかわそんりつせきかわちゅうがっこう 関川村立関川中学校	3年	す がいせな 須貝汐那	個性を思う気持ち
優良賞	いといがわしりついつがわひがしちゅうがっこう 糸魚川市立糸魚川東中学校	2年	こまつ さら 小松沙羅	気づいていますか
優良賞	いといがわしりついつがわちゅうがっこう 糸魚川市立糸魚川中学校	3年	おさ ないかより 長内夏依	共感ではなく理解を
優良賞	いといがわしりつおのみちゅうがっこう 糸魚川市立青海中学校	3年	いし だきえ 石田貴恵	小さな差別から
優良賞	じょうえつしりつゆうしちゅうがっこう 上越市立雄志中学校	3年	たち いらん 建入蘭	「普通」を認め合う
優良賞	みょうこうしりつみょうこうちゅうがっこう 妙高市立妙高中学校	2年	かな ざわはると 金沢遥斗	一言の思いやり
優良賞	じょうえつしりついたくらちゅうがっこう 上越市立板倉中学校	3年	さい かわあやか 齊川絢香	見た目の差別
優良賞	さどしりつはたのちゅうがっこう 佐渡市立畑野中学校	3年	なかむら ひとば 中村一葉	あなたの一言で
優良賞	うおぬましりつゆのたにちゅうがっこう 魚沼市立湯之谷中学校	3年	かな いあんり 金井杏璃	一人ひとりの 人権を大切に

令和5年度 全国中学生人権作文コンテスト 新潟県大会 応募作品内容別内訳調べ

		作 品 の 内 容	作品数	割合(%)
1		女性の人権に関するもの	192	2.1
2	子 ど も の 人 権 関 連	いじめに関するもの	(2,017)	(22.0)
		児童虐待に関するもの	(104)	(1.1)
		上記以外の子どもの人権に関するもの	(456)	(5.0)
		子ども人権関連 小計	2,577	28.1
3		高齢者の人権に関するもの	165	1.8
4		障がい者の人権に関するもの	452	4.9
5		部落差別（同和問題）に関するもの	109	1.2
6		外国人の人権に関するもの	386	4.2
7	感 染 症 関 連	新型コロナウイルス感染症に関するもの	(144)	(1.6)
		その他の感染症（HIV・ハンセン病等）に関するもの	(54)	(0.6)
		感染症関連 小計	198	2.2
8		インターネットによる人権侵害に関するもの	1,032	11.3
9		拉致問題に関するもの	47	0.5
10		性的マイノリティに関するもの	660	7.2
11		戦争や平和に関するもの	470	5.1
12		環境問題に関するもの	65	0.7
13		上記（1～12）以外の人権に関するもの	2,802	30.6
合 計			9,155	100.0

(注) 複数のテーマを内容としたものについては、主たるテーマを計上した。

## ～いじめ問題に関する再度の緊急メッセージ～

「いじめ防止対策推進法」が平成25年から施行され、いじめ防止基本方針の作成等が国及び学校に義務づけられました。学校でも早期発見に努めています。しかし、児童生徒間のいじめはより潜在化しており、教員が発見することがますます難しくなっています。インターネットを使った学外でのいじめの場合はなおさらです。痛ましい出来事も後を絶ちません。

また、原子力発電所事故の被災児童に対するいじめ事案も問題となりました。学校におけるいじめに関する人権侵犯事件数は8年連続して高水準で推移し、法務省の人権擁護機関が、令和4年に新たに受理した事件数は、1,047件となっています。

そこで、全国人権擁護委員連合会として、改めて緊急メッセージを発信させていただきたいと思います。

いじめをしている人は遊び半分やストレス解消のつもりかもしれませんが、しかし、いじめは相手の人を死に追いやりかねません。自分の人生も取り返しつかないものにしかねません。いじめは絶対にしないでください。いじめをしている人はすぐにやめてください。

いじめを受けている人、いじめを見た人、いじめを聞いた人は、私たち人権擁護委員に連絡・相談してください。

小中学校を通して全国の小中学生に配布した「子どもの人権SOSミニレター」を使って連絡・相談しても、全国共通・無料の「子どもの人権110番」(0120-007-110)に電話してもかまいません。メールも受け付けています。秘密は必ず守ります。

私たち人権擁護委員は、「人権」を護り、救済するための仕事に取り組んでいます。いじめを、そして、仕返しをストップさせるために、全国1万4千人の人権擁護委員が全力を尽くします。どうか声をあげて、私たちに助けを求めてください。

保護者の皆さんも、お子さんを護るために、気になることがあれば遠慮なく、人権擁護委員に声をかけてください。

人の命はかけがえのないもので、子どもの未来は人類の未来なのです。この未来を希望に満ちたものにしたい。これが私たちの願いです。

令和5年5月22日

全国人権擁護委員連合会

# 世界人権宣言



「鳥」「自由と解放」を表わしたもの

小 木 太 法 書  
オ タ ビ オ ・ ロ ス 画

## 世界人権宣言

### 第一条

すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。

わたしたち人権擁護委員はあなたの力になります!!



人権イメージキャラクター  
「AKEN(あけん)」

くる  
ごま 苦しいこと  
困ったことなど  
か 書いて送ってね



人権イメージ  
キャラクター  
「AKEN(あけみちゃん)」

私たちはあなたのサポーターです!!

子どもの人権

SOS  
ミニレター

悩みを教えて!  
必ず力になるよ!

今、家や学校で困っていることはない?  
誰かに相談したり、話したりできない  
ことだっているあるよね。  
そんなときはキミの悩みをこの手紙に  
書いて、教えてね。  
いっしょに考えて、  
悩んでいるキミの力になるよ。



人権イメージキャラクター  
「AKEN(あけみちゃん)」



人権イメージキャラクター  
「AKEN(あけん)」

悩みが  
あつたら  
手紙を  
書いてね

秘密は  
守るよ

電話で相談 子どもの人権110番

フリーダイヤル ぜろ ぜろ なな の ひゃくとうばん  
0120-007-110 (通話無料)

受付時間 8:30~17:15 (土・日・祝日を除く)

メールで相談 子どもの人権 SOS-eメール

<https://www.jinken.go.jp/>



SOSミニレターに関するお問い合わせは、新潟地方務局人権擁護課まで ☎025-222-1563

新潟地方務局・新潟県人権擁護委員連合会

## 【審査員・後援】

### 〈新潟県大会審査員〉

(敬称略、順不同)

新潟県教育庁義務教育課指導主事	五十嵐健太
新潟日報社編集局報道部第二部長	塚田 朋弘
NHK新潟放送局	
コンテンツセンター・センター長	篠田 憲男
株式会社アルビレックス新潟	
管理本部総務部総務課マネージャー	速水 衛
新潟地方法務局長	相原 茂
新潟県人権擁護委員連合会会長	山崎 光子
新発田人権擁護委員協議会人権擁護委員	片桐 照
長岡人権擁護委員協議会人権擁護委員	齋藤 榮作
上越人権擁護委員協議会人権擁護委員	古見 豊

### 〈後援〉

新潟県教育委員会、新潟日報社、毎日新聞新潟支局、  
読売新聞新潟支局、朝日新聞新潟総局、NHK新潟放送局、  
BSN新潟放送、NST新潟総合テレビ、TeNYテレビ新潟、  
UX新潟テレビ21、FM新潟77.5、株式会社アルビレックス新潟、  
株式会社新潟アルビレックス・ベースボール・クラブ



人権擁護活動  
シンボルマーク

このシンボルマークには、『人権』はすべての人が生まれながらに持っているものであり、世界中の人々の『人権』が最優先に尊重され、共存し合っていかなければならないという願いがこめられています。

## 新潟地方法務局・各支局連絡先

庁名	住所	電話
新潟地方法務局	〒951-8504 新潟市中央区西大畑町5191	025-222-1563
新津支局	〒956-0031 新潟市秋葉区新津4463-1	0250-22-0547
三条支局	〒955-0081 三条市東裏館2丁目22-3	0256-33-1375
新発田支局	〒957-8503 新発田市新富町1丁目1-20	0254-24-7102
村上支局	〒958-0835 村上市二之町4-16	0254-53-2390
長岡支局	〒940-0082 長岡市千歳1丁目3-91	0258-33-6901
十日町支局	〒948-0083 十日町市本町1丁目上1-18	025-752-2575
柏崎支局	〒945-8501 柏崎市田中26-23	0257-23-5226
南魚沼支局	〒949-6608 南魚沼市美佐島61-9	025-772-2164
上越支局	〒943-0805 上越市木田2丁目15-7	025-525-4133
糸魚川支局	〒941-0058 糸魚川市寺町2丁目8-30	025-552-0356
佐渡支局	〒952-1561 佐渡市相川三町目新浜町3-3	0259-74-3787

### お知らせ

※ 本作品集の作品を地方自治体が広報紙に掲載したり、学校が教材に使用される場合などには、下記にご連絡ください。

〒951-8504 新潟市中央区西大畑町 5191 番地  
新潟地方法務局人権擁護課  
TEL 025-222-1563・1564

法務局では人権擁護委員、人権啓発活動ネットワーク協議会とともに様々な人権啓発活動を実施しています。主な活動は「<https://houmukyoku.moj.go.jp/niigata/keihatsu>」に掲載していますので、ぜひご覧ください。



表紙の写真は、じんけん大使として活躍している「トッキッキ」と「アルビくん」（アルビくんファミリー代表）の様子です。

# どうしたの？ きかせて あなたの ほしい。 きもち。

気づいてね！あなたが一人じゃないことに！

**電話で相談**  
電話料金はかからないよ。(無料)  
携帯・スマホからもかけられるよ。

**子どもの人権110番**

フリーダイヤル ぜろぜろのなのひゃくとおばん  
**0120-007-110**

【相談】 月～金曜日 朝8:30～夕方5:15  
【受付】 土・日曜日、祝日 平日の朝晩午後  
急ぎな相談です。

**手紙で相談**  
子どもの人権 **SOSモニター**

うれしいこと、困ったことなどを書いて送ってね

**メールで相談**  
子どもの人権 **SOS-eメール**

右のQRコードを携帯電話で  
読み込めば、HPにつながります。

<https://www.moj.go.jp/SHKEN/shken113.html>

法務省のHPでも相談を受け付けています。  
<https://www.moj.go.jp/SHKEN/shken113.html>

**LINEで相談**  
LINEじんけん相談

友達追加はコチラから▶

[@shjwrensoudan](https://line.me/tv/@shjwrensoudan)

私たち人権擁護委員はあなたの力になります!!  
私たちはあなたのサポーターです!!



こ じん けん  
**にいがた 子どもの人権だより**

**48+**  
2023.9.1



新潟県庁法務局・新潟県人権擁護委員連合会・新潟県人権擁護委員連合会子どもの人権委員会・新潟県中央地区西人権1511部 電話 095(222)1564 FAX 095(225)2693

**電話で相談** **子どもの人権110番**  携帯電話・スマートフォンからもかけられます。

電話でも相談に応じています。電話料金は、**無料**です。

通話無料 **0120-007-110** フリーダイヤル ぜろぜろのなのひゃくとおばん

【相談時間】 月曜日～金曜日(朝8:30～夕方5:15)

